

学 位 論 文 要 旨

氏 名 松村 謙一

題 目 形成的アセスメントに基づく中学校社会科授業開発研究
— 知の共有化をめざす「学習支援のためのツール」に着目して —

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本研究の目的は、抽象的で捉えづらい空間認識、時間認識、現代社会認識の諸概念に関する知識に着目し、これらの知識を視覚的に把握可能なツールにするための「学習支援のためのツール」を開発し、このツールを教育者と学習者で共有することによって学習目標の達成に結び付けられる中学校社会科授業開発の理論と方法を明らかにすることである。

第1章では、まず、形成的アセスメントの理念が社会系教科に導入される教育的意義を整理した。そして、形成的アセスメントのなかでも「学習のための評価」に特化させて、「学習のための評価」を基盤とする「形成される社会認識」の構造を提示し、教育者と学習者との間で一般的知識における知の共有化が行われる社会科授業モデルの方向性を明らかにした。

第2章では、中学校社会科の三分野における一般的知識に関わる社会認識体系を六つの授業類型で提示し、言語主義から離れた構文的構造に基づく授業開発の方向性を明確にした。そして、中学校社会科の三分野における一般的知識を構成する理論的な背景を整理して、記号論の立場から「学習支援のためのツール」を開発し、その使用方法を提示した。

第3章では、第1章と第2章で明らかにしたこと土台にして、「責任の段階的移行」論に基づく、「学習のための評価」を基盤とする社会科授業モデルを開発した。教育者と学習者をつなぐための「学習支援のためのツール」を結節点とする知の共有化の在り方を提示し、社会認識形成を保障する責任を教育者、形成された社会認識を実社会・実生活に開いていく責任を学習者というように、学びの主体性を分担化する授業モデルとなっている。

第4章では、「学習のための評価」を基盤とする中学校社会科地理授業モデルを開発、実践し、一般的知識としての共時的空間認識の形成状況について検討した。結果として、①開発授業は、学びの主体性を教育者から学習者へ委譲させながら、共時的空間認識に関わる諸概念を獲得していく学習過程が採用され、この学習過程が機能したことによって、②〈人間と自然環境の相互依存関係〉、〈空間的相互依存作用〉、〈地域〉に関わる共時的空間認識の形成が図られていた。

第5章では、「学習のための評価」を基盤とする中学校社会科歴史授業モデルを開発、実践し、一般的知識としての通時的時間認識の形成状況について検討した。結果として、①開発授業は、学びの主体性を教育者から学習者へ委譲させながら、通時的時間認識に関わる諸概念を獲得していく学習過程

が採用され、この学習過程が機能したことによって、②「時系列」の視点である〈時間〉の一部、「諸事象の推移」の視点である〈変化と継続〉、「諸事象のつながり」の視点である〈原因と結果〉の一部、「諸事象の比較」の視点である〈類似と差異〉の一部、「諸事象の解釈」の視点である〈重要性〉の一部に関わる通時的時間認識の形成が図られていた。

第6章では、「学習のための評価」を基盤とする中学校社会科公民授業モデル（経済）を開発、実践し、一般的知識としての経済における共時的現代社会認識の形成状況について検討した。結果として、①開発授業は、学びの主体性を教育者から学習者へ委譲させながら、共時的現代社会認識に関わる諸概念を獲得していく学習過程が採用され、この学習過程が機能したことによって、②〈希少性〉、〈分業と交換〉、〈トレード・オフ〉、〈費用と便益〉、〈価格と競争〉の概念と、四つの〈起業家精神〉の要素に関わる、経済における共時的現代社会認識の形成が図られていた。

第7章と第8章では、共時的空間認識を基盤とする一般的知識、通時的時間認識を基盤とする一般的知識、共時的現代社会認識を基盤とする一般的知識の転移を促すための概念型探究カリキュラムを開発し、一般的知識が転移されたと考えられる事例を検証していきながら、「学習のための評価」を基盤とする社会科授業モデルを再評価した。結果として、「学習のための評価」を基盤とする社会科授業モデルは、実社会・実生活を舞台とする学習場面においても一般的知識を転移できる力を付けていける可能性を示すことができた。また、社会科を基盤とする概念型探究カリキュラムは、学習者は「学習支援のためのツール」を起点にしながら、一般的知識の獲得と洗練を繰り返し行う学習ができるという内容になっていることを明らかにした。

本研究の成果は、①「学習支援のためのツール」を結節点として、教育者と学習者の知の共有化を明確にする社会科授業モデルを開発したこと、②「学習のための評価」を社会科授業モデルに導入する際に、「責任の段階的移行」論を埋め込んだこと、③一般的知識の転移を促す概念型探究カリキュラムを開発したことの3点に集約できる。残された課題は、学習者の多様性に応じる形で、知の共有化に対する評価指標と評価基準を開発し、本研究で提案した授業モデルを精緻化していくことである。